

2013/8/29

テーマ「写真の現在」

パネラー チェ・ジスン(韓国江原道春川市在住写真家/韓国江原道芸総会長)
シム・サンマン(韓国江原道春川市在住写真家)
福島多暉夫(米子市在住写真家/米子市写真家協会会長/JPA 理事)
山本浩一(湯梨浜町在住写真家/倉吉市展・県展無鑑査)
山根喬市(倉吉市在住写真家/倉吉市展・県展無鑑査)
山田敏和(倉吉市在住写真家)

コーディネーター

計羽孝之(倉吉市在住版画家/倉吉文化団体協議会会長)

基調提案

日韓親善写真家交流事業

江原道写真家協会と倉吉文化団体協議会

江原道写真家協会招聘作家との意見交換会

シンポジウム「写真の現在」基調提案

写真家 シム・サンマン 沈 相 萬(Sim Sang Man)

基調提案要旨

アマチュアリズムから抜け出した

韓国写真は 1990 年代から本格的に近代化、国際化のプロセスを経て、アマチュアリズムから抜け出した。その結果、写真の文化を専門家集団が主導し始めた。また、1990 年代後半には西洋で写真の理論を専攻した理論家たちが活動を開始しながら、写真アカデミーで写真理論が普及し始めた。2000 年代中盤からは、アマチュア写真家や写真愛好家のための講座にも写真理論講座が開設された。また、1990 年代後半から専門的な企画者によって写真展示が企画された。

写真展が企画されだした

そして、1990 年代中盤前後で国内の私立美術館や商業ギャラリーでも写真に興味を持って、一部の私立美術館で写真展示を企画したこともある。その後、2000 年代初頭からガーナアートセンターを始め、国内の商業ギャラリーで本格的に国内外の作家たちの写真展示を企画し始めた。それと共に、美術館や商業ギャラリーで展示会を企画したり、展示作家を公募するとき写真を媒体とする作家も含まれることが一般化になった。

デジタルカメラの出現で環境が変わり始めた

また、東江国際写真祭をはじめ、国際性を標榜する大規模な写真イベントがいくつかの都市で開催されている。そのほか、商業利益を目的とした海外の写真家の大規模な展示会も毎年展示されている。それだけではなく、美術市場の最大の好況期(2006 年～2008 年)に一部の写真家の作品が美術市場で販売されることもあった。また、デジタルカメラの普及をはじめとする社会文化的な環境の変化によって写真に対する社会的な関心も高まった。ペ・ビョンウ、ギム・アタ、クォン・ブムンなどの中堅写真家と、若い写真家の作品が海外で紹介されることもあった。



クオン・ブムン

クオン・ブムン



ウ

ペ・ビョン





ペ・ビョンウ

ペ・ビョンウ



ペ・ビョンウ

ペ・ビョンウ

写真美術館が出来た

韓国の写真は、現在、前世紀とはまったく異なる風景を繰り広げている。それで、重要な課題と争点も違っている。まず、写真家の関心と活動領域が変化している。また、東江国際写真祭、大邱写真ビエンナーレ、ソウル写真フェスティバルなど国際性を標榜した写真イベントが増えており、商業を目的とした大規模な展示もたゆまず開催されている。そして東江写真博物館、韓美写真美術館、釜山ゴウン写真美術館など、写真を専門に展示する大規模な展示場ができたし、写真界への影響力が徐々に拡大されている。最後に、写真批評賞、次の作家賞、イル写真賞、東江作家賞など写真家を対象にした賞がたくさんできたし、いくつかの写真賞は賞金も増えている傾向にある。このような変化をより具体的に紹介する。

若い作家の台頭

最初に、写真家の関心と活動領域が変わったのは、韓国写真の中の変化のためではなく、社会文化的な環境の変化と写真の社会的な地位が高くなったからである。世界的に現代美術で写真の比重が大きくなるため、国内の美術制度でも写真への愛情と関心が生まれてきた。だから、若い写真家を中心に写真家としての関心と作家としての態度が変わった。作家として、あるいは芸術家として継続的に長く活動するためには、写真界内部での活動に限らず、国内外の美術界全体に活動領域を広げなければならないということを若い写真家たちは認識している。それで、作家としての活動態度、作品の主題、制作方法、展示方法、展示場などが過去の先輩写真家とは全く違って脱ジャンルのである。多分に概念的で、より緻密で、計画的である。また、自分のプロモーションにも専門的な態度を見せている。

写真作家としての活動目標が変わった

写真家としての活動目標が変わったのだ。過去のようにいい作品を制作して注目される展示をするだけにとどまらず、より良い空間で展示をすることを望んで、ビエンナーレのような国際的なイベントに招待される作家になることを望んでいる。写真制度だけでなく、美術制度全般から認められる芸術家になりたがるのである。

国際的な写真イベントが開催される

二番目に、国際的なイベントを目指す大規模な写真イベントが多く開催されているのも変わった韓国写真の風景の一つである。その中で東江国際写真祭を除いて、他のイベントは10年も経ていないイベントだから、アイデンティティを確立している過程にある。ただ、東江国際写真祭は今年で12回目のイベントが開かれるため、イベントの性格が明らかになったことは確かである。特に昨年は、東京写真美術館の所蔵作品と日本写真家協会が企画した展示会を開いた。

写真の概念が変化

韓国写真は現在、大事な時期にある。媒体環境の変化のため、写真の概念が変化していて、制度や社会文化的な環境が急速に変化している。このような変化をうまく克服し、一歩先進するためには、公的な制度や公的な行事が公的にもっとうまく機能しなければならない。

専門家の育成が必要

そして、世界的な作家も養成されるべきで、写真家の外にも理論家、プラン企画者、キュレーター、写真芸術行政家などの写真に関する様々な分野の専門家が輩出されるべきである。

その外にも写真のための展示スペースも十分に確保されるべきだ。公的な空間でも、個人や企業が運営している空間も十分に確保されるべきで、公的な空間や、個人や企業が運営している空間であろうと、文化芸術のために空間を運営する人には使命感が必要である。特に後発媒体である写真表示のためのスペースを運営する人はもっとそのような態度が必要である。韓国写真の現実はまだ劣悪であるからだ。このような人々が展示場を運営すると、韓国写真文化の発展は肯定的になる。また、公的な行事に対する公的な態度が必要である。個人の私的な欲を捨てなければならない。そして、写真文化を主導する公的な機関である国公立写真美術館を建てなければならない。最後に、作家のほか、写真の理論家、展示企画、写真の歴史研究家、写真芸術行政家などが体系的に育成される必要がある。また、それが可能であれば写真学科の教育課程ができるべきである。現在、全国で開催されている写真イベントや写真文化の発展のためには必ず必要なことである。

韓国の写真文化が多様化して、より成熟するためには大衆を対象とした商業的な目的の展示も多く開催されて、より多くの人々が写真芸術と物理的にも心理的に近づくことも大事であるが、写真史的にも美学的な価値のある展示がたくさん企画され、大衆の目をアップグレードし、新しい議論を常に生産することも何よりも大事なことである。そして、写真文化がもっと発展するためには、芸術的な価値のある展示を継続的に企画して、展示して、完成度の高い作品を所蔵して保存する業務を担当する写真美術館が建設されるべきである。専門の公的な写真制度と空間が用意されるべき

韓国の写真文化は、過去20年の間に急速に発展し、成熟した。そして、写真の社会的な地位も過去とは比較にならないほど高くなった。しかし、より成熟させるには、専門の公的な写真制度と空間が用意されるべきである。それが可能であれば写真展示文化ももっと発展するだろう。

基調提案者プロフィール

○ 写真家シム・サンマン 심 상 만 (沈相萬) Sim Sang Man 1943年7月29日生
韓国東江国際写真祭 運営委員、江原日報写真同好会 会長、写真ナル会員/指導委員、4人

テーマグループ 会員

個人展(ソウルインサイトセンター外) 5 回、グループ展(ソウル国際写真フェスティバル外) 30 回

韓・中写真交流及びセミナー(発表) 参加、東亞日報社 客員記者。

見慣れない空間への旅

キム・ヨンテェ 金 泳兌 김영태 Kim young tae

(写真批評 現代写真フォーラム代表)

写真は記憶、思い出などと多様な形で関係をもつ媒体である。また、時間という概念とも必然的に深い関係がある。世の中に存在する写真の多くは、このような背景から作られた。特にその中でも旅行写真は何かを記念して思い出にするために製作された代表的な例である。19 世紀、写真が発明された当時は、ヨーロッパ人が外の世界に関心を持ち始める時であった。しかし、交通手段が発達していなかったため、遠くに、あるいは未知の世界への旅をするというのはリスクがあったし、冒険だった。当時の旅行者の中にはカメラを持って旅をしながら神秘的で見知らぬ対象と環境を撮る人々がいた。彼らは旅行で撮った写真と文と一緒に編集して本を出版した。また、旅行の写真で本を出版するために写真撮影の旅行をする人々も出てきた。大衆は本を通じた間接体験で外の世界への好奇心を満たして、情報を得た。

現在も旅行と写真は密接な関係がある。旅に出る際の必需品として取りまとめるものの一つがカメラである。見慣れない所への旅行は、人々の心を興奮させるときめくようにする。このような旅行者の心理が旅行の写真によく反映されている。旅行の写真は見知らぬ世界への大衆の憧れを満たすことから出発した。このような文化的な現実を反映した代表的な例の一つが、20 世紀モダニズム写真の代表的な写真家であるアンリ・カルティエ・ブレッソン (Henri Cartier Bresson) が撮影したドキュメンタリー写真である。彼は世界の主要都市を旅行しながら写真を撮った。外観に重点を置いた写真作業をしたのではなく、自分の内面世界を投影して現実を表現した結果である。ブレッソンは直観的な写真を撮るが、対象を通して自分の美的な信念や世界観を表わした。表皮的な写真撮影をしていなかったということだ。

21 世紀の現在、写真は最も大衆的な媒体である。誰でも簡単に技術的な負担なしでアクセスすることができる。旅行が一般化したこと共に写真撮影も日常そのものになったのだ。旅行と写真は大衆と不可分の関係にある。旅行の思い出を長く記憶して残そうとする欲求の結果だ。また、本の出版とも関係がある。旅行の写真が一段階昇華するためには、同時代的な議論を生産しなければならない。この点で差別化された芸術的な価値を確保することができる。旅行の写真の出発点は、個人的な欲望や文化的な環境の変化だ。しかし、撮った人の態度に応じて結果の意味は変っていく。

今回、ギリシャの首都「アテネ」と有名観光地である「サントリーニ島」を旅しながら撮影した写真を展示するチェ・ジスン(崔洵洵)は写真家であり、「韓国芸術文化団体総連合会江原道連合会」会長を務めている芸術行政家である。写真家として自分の作品世界を広げて見せながら、江原道文化芸術の発展のため、様々な活躍をしている熱情的な作家だ。作家は古代文明の発生地であるギリシャを旅しながら、直観的に自分の内面世界を誘惑する場面と対象を捕捉した。見慣れない所へ旅に行けば、すべてが神秘で、旅行者の感性を刺激する。しかし、作家は写真家としての真摯な態度を維持しながら、自由であるが、節

制された視点で対象を再構成した。

ヨーロッパは公害から自由な自然環境を維持しているため、澄んだ空気で空があまりにも美しい。また、カラーが感覚的で独特の文化が感じられる。特にギリシャは古代文明と現代の文化

が効果的に交っているので、旅行者を見慣れない時間、見慣れない空間に魅惑させる。作家の作品でも、このような文化的な特徴が効果的に表れている。

チェ・ジソンはアカデミックな構図にとられないカメラアングルで、ギリシャだけで見られる神秘的で美しい風景を自由に再現した。作品ごとにギリシャの風景と伝統的な文化の魅力が明らかになっており、見る人も風景の中に耽けさせる。

この点で、作家の旅行の写真は平凡から脱却する成果を得た。表皮的な再現ではなく、深層的な再現をしたからである。

作品をもっと具体的に見てみると、カラー写真ではギリシャ固有の色彩が明らかになっていて、白黒写真では美しい自然景観とギリシャの文化的な風景が一团となって、また違う視覚的な情報を提供する。また、ギリシャだけの独特の風景と文化、そして作家の自由な画面構成能力が融合され、作品の完成度を裏付けている。だから、この展示を観覧する人々は、古代文明の世界に深く耽けるだろう。こういう点が、作家が得た芸術的な成果である。

報告